

## 瀬戸内わくわくプロジェクト——海とともにある未来へ

瀬戸内わくわくプロジェクト 代表  
丸山 幸子

### 1. 原点はふるさとの漁港から

瀬戸内わくわくプロジェクトは、2021 年春頃、新型コロナウイルスによる生活の変化が社会全体に広がり、父が亡くなり母ひとりとなった事で、私がマレーシアから日本に帰国し、18 歳になるとすぐに出た故郷である岡山県と東京の多拠点生活をスタートした時期に、静かに産声をあげました。社会を揺るがす大きな変化で疲弊しているふるさとに何か恩返しができないか。そんな思いが、プロジェクトの原動力となりました。

高梁市という里山に生まれた私にとっては瀬戸内の海は憧れの場所でもあったのですが、以前と違い瀬戸内海沿岸の漁村は、高齢化や魚価の低迷、漁業者の減少など、さまざまな課題を抱えており、海の恵みを受けながらも、漁業と地域社会、次世代との接点が失われつつあることを知りました。そして、そこにコロナ禍が追い打ちをかけ八方ふさがりの状況がありました。そんな中でまず取り組んだのが、岡山県倉敷市の下津井漁港での地域活性イベントでした。地元の漁業者、商店街、学校関係者、自治体、そして市民を巻き込んだ「下津井わくわくマルシェ」は、海の恵みと地域のにぎわいを結びつける第一歩となりました。

魚の販売や漁師さんとのふれあい、地元の食文化紹介などを通じて、漁港が「人が集う場」に生まれ変わる手応えを感じました。活動は地域住民の共感を得て、回を重ねて 2025 年度の春には開催 13 回目を数える事になりました。



写真① 下津井で初めて子ども店長企画を始めた時

## 2. 漁港の風景ににぎわいを——地域と人の再接続

地域とのつながりを再構築する上で、象徴的だったのが「わくわくマルシェ」の開催で、下津井港では春・秋や春・夏・秋と年 2～3回継続開催され、旬の魚介や地元野菜、手づくり惣菜が並び、最大で 1,200 名以上の来場者が訪れるイベントとなりました。

香川県さぬき市の津田港からの依頼があり、2022 年には「津田港わくわくフェスティバル」として展開。港町の歴史や文化を掘り起こしながら、地域の小中高校生が主体となって準備・運営に参加しました。移動水族館や魚の解体ショー、子ども店長による販売など、子どもたちが地域と海の担い手として関わる仕掛けを多く盛り込みました。

活動は単なる「イベント」ではなく、地域のストーリーや人との縁をつなぎ直す場として機能し始めています。漁業者と住民、子どもと高齢者、都市と地方——海辺に立ち、そこに息づく人々が語り合う姿が日常となりつつあります。津田港わくわくフェスティバルも 2025 年 8 月開催で、6 回目を迎えます。



写真② 津田港わくわくフェスティバルで魚を販売する一幕

## 3. 「ONE 瀬戸内」という理念

下津井での活動を通して見えてきたのは、瀬戸内海という広域にまたがる海域が、県境や行政区域に縛られ、個別に動いているという現実でした。香川、愛媛、広島、岡山、山口——瀬戸内海はそれぞれの県に属しながら、自然・文化・経済が密接につながっています。

この海を「一つの地域」としてとらえ、点を線に、線を面に広げる必要がある。そう考え、私たちは「ONE 瀬戸内」というコンセプトを掲げ、2023 年、正式に「瀬戸内わくわくプロジェクト」として任意団体を設立しました。

理念は三つあります。

- ① 瀬戸内海の水産資源と環境を未来へ残すこと。
- ② 広域連携によって地域の水産業を支えること。
- ③ 海と人、自然と社会をつなぐ体験を次世代に届けること。

この理念のもと、岡山・香川・広島・愛媛といった各地で、漁港の活性化イベント、体験型教育プログラム、ラジオや SNS を通じた情報発信など、多面的な活動を展開しています。



写真③瀬戸内海についての今と課題を発信するために

#### 4. 「島へ集まれ！こどもたち」——五感で学ぶ海の世界

2023 年度から本格始動した「島へ集まれ！こどもたち」は、瀬戸内の島々での体験学習プログラムです。これまでに 2023 年度は、岡山県・六甲島、香川県・豊島で、2024 年度は、岡山県・白石島、香川県・蔦島、広島県・百島で開催され、約 200 名の小学生が参加しており、2025 年度は、香川県・小豆島、岡山県・白石島、愛媛県・弓削島で開催を予定しており、3 年間で延べ300名以上の小学生が参加する事になります。

特徴は、瀬戸内海に面する複数の県の広域連携にあり、「ONE 瀬戸内コンセプト」を色濃く反映しています。瀬戸内海の水産資源と環境を未来へ残すという、この未来は「こどもたち」と捉えており、こどもたちが海を好きに、魚を好きになってもらわない限り、海や水産業の未来はないと考えて活動しています。漁業関係者の皆様の協力を得て、子どもたちへの漁業体験、魚の解体・調理、ビーチクリーン、漂着ごみの分別などの体験を通じて、海の「恵み」と「課題」の両方を楽しく学んでもらいます。

2024 年 10 月に開催された百島でのプログラムでは、地元の漁師と一緒に地引網を引き上げた後、海辺で魚を焼いて食べる体験がありました。自分の手でとった魚をさばき、食べるという一連のプロセスに、子どもたちは目を輝かせて取り組んでいました。

一方、2025 年 7 月の弓削島では、海洋ごみ問題に焦点を当てた科学教育を実施する予定で、弓削島商船高等学校の協力のもと、マイクロプラスチック採取実験や新造船「弓削丸」の操船体験を通して、海と技術について学びを結ぶ新たなプログラムを行う予定です。





写真④ 初めての小豆島開催。地引網で魚がたくさん取れました。



写真⑤ 3年目にして岡山・香川・広島・愛媛から子どもたちが参加。

## 5. おわりに——次の世代へ渡すバトン

「瀬戸内わくわくプロジェクト」はまだ始まったばかりの小さな取り組みかもしれませんが、その背後には、瀬戸内海という日本の財産を次の世代に引き継ぐ大きな使命があります。

漁業者の誇り、子どもたちの好奇心、地域の歴史、そして人々のつながり。こうした「見えない資源」を丁寧に編み直し、海とともに生きる暮らしを再構築していくことこそが、私たちのめざす未来です。

これからも「点を線に、線を面に」。一人ひとりが瀬戸内の担い手であるという意識を持ち、地域を超えて手を取り合う輪を広げていきたいと思えます。